重修真書太閤記 十八

へ13
459
98

帝國圖書館藏

特3:ヘ
門政省
459
98

消 稲葉

重修真書太閤記十編卷之廿二

加藤清正金子傳兵衛と謀る事
并加藤吉川勇戰の事

金子傳兵衛ハ必死の戰ひと持て加藤吉川の勢ゑ當らんとせゑ思ひも寄ぬ大風大雨のためゑ雙方陣と引て晴と待たゑうとも四五日ハ小止たゑをびやくてハ何日ゑ上方勢ゑ向て雌雄を決をへーと徒然ゑ心と苦めけるゑ漸ゑて快晴ゑ及ひけるハ久武内藏助と後備とす我ゑ等ーゑ者と撰ひて加藤吉川両勢の陣と志ーて切入あてゑ

周政會印

〻い清正元長よ馳向ひ責て一人と討取ふいたと
ひ我身戰場よ没滅をるとも其名後代よ傳らるの
ころ〻び長曾我部家の大利となるべく其上よ久
武内藏助我跡と黒めて吉川ゑもをよ加藤ゑもセ
〻よ殘卒と追捕し此國よ足と止めさをまゝさなう
是と冥途黄泉の思ひ出となをつさふり殊よ彌三
郎信親君の皎り聞せゑひても傳兵衛おもいはあそ
夫迫ゑもおゝたんおもと万ろ一よ仰らもとおハ實
よ嬉しうるへさそとて馬物具鎧太刀よ至る迫お
れと最期とおつのひ定めゝ上なれい別て美々〻〻
出立たう愚うよ見ゆるのなうとも死と極めて

一期の大事とふと時いつうなる勇士も破う得を
ゑゝとや是い四國ゑ聞えし金子なうたもうい是
と遮う止ん見るもの是よ勇ことまゝ聞めの耳と
涼まゝむ加藤清正ゑゝも其氣とさとうつこと
年若ふれとも末代權化の名大將韓大明とそその
名と轟うしゑも理ふう四國といへい何國も同一
く長曾我部の持國ふもい更ゑ勝劣ゑるへさいそ
もふひもとも合戰よ及て阿州讃州伊豫の國いの
れも寄手いこう〻名將ふう軍ゑ逢こと幾度といふ
こなく謀ようこと異國の張良陳平い見もを
ぬむう〻の傳えなう楠正成赤松律師それ等う例

と引こと丶幼あそびの戯ごとさゝせーわとの勇士ふつたいい合戰いまゝ始まるゝぬそのうちふ内大臣秀吉公の御心ゝう撰ひ出ひ事なゝう海と隔てたその人丶一度も面と對をゞその機と察しその強弱と百里の外丶知ゐゝと天授の名大將上下一万年四万十万里と稱えー人もあうとうや清正前後と見うへうてあの様ふる死武者丶めけ合て命と殞ゆい詮もなー但敵ゝうゝう來るとあーらそぬといゝ法も有まー四國勢兎そるなゝい角せゝ角そるなゝい鬼をよと諸手丶下知して待わと丶金子傳兵衛あれと望ことゝや上方勢いゝう來

るそちとも擬議をと拵合ゝるゝひ迫て上方武士丶笑そるふ命い二りふゝ死ぬるい正丶一度ふゝう進めゝと下知ーつゝ矢合の鏑射て鉄炮二つ三つゝふつやつなゆ鎗と入打物とうて切ゝうる加藤う先陣飯田角兵衛持て開いて追取卷六七十合そ闘ふゝうこの中丶清正う居たると知ていさつゝ丶颯とうけ拔味方と見ゝい五百余騎一騎もうゝれそ銘々丶首一つ二つ取ぬめのも無うしろい傳兵衛あゆしや然い此陣い雜兵のこるて有けるう口惜や残念やと獅子奮迅の勢となー二陣の勢丶切ゝうる是い森本儀大夫とて攝津國の住人

荒木あとの一類なり八百余騎と雁行に列ね金子と中に取こめて一騎も余さじとうけると見て金子傳兵衛ひとを定めて加藤虎之助なるべしいていざと呼ばるゝ切うゝ出い森本も堪えず引退く傳兵衛つと駈ぬけ是も清正い居さるなり然い何處にあるやらん覺束なし去い是にあるなゝめと三陣に切うゝる三陣い木村又藏井上大九郎齋藤立本一千餘騎にて扣えさう傳兵衛う手の者後連て面も振て切て入引組差違ゝ一足も引ひうゝと四角八面に雑たゝを廻るもろ共も加藤と見付得ぬい何處に馬と立ゝやらん勢

い高ゝ紛れへあゝと駈入駈出六七度ものこと立つもとも更に大將とあゝさのに出合とあるうの不思議に氣つろに力屈して見えけるに木村井上ところや敵いつうにそ透間あるをかをう立ると火出るをうう攻めけゝれい金子も爰と大車と切合たう森本儀大夫取てうへ横合ろう突立しうい金子う勢敵と左右に引うひ陰に閑さ陽に閑一合一離追めくうゝ戰ひけるへいよに珍敷軍かに加藤う手の者金子定めて狼狽ゝ隊伍も亂れつらんとおのひつるに傳兵衛う五百餘騎次第と亂さじ透間なゝたとへい鵜綱に似てぬさゝ自由

と得たり〳〵い清正も實に四國第一と呼ばるゝも理なるかなと感じあり吉川元長なほと見て能塩合そう〳〵と下知〳〵三千餘騎と一手に〳〵是非なく突てゝうけると金子急と見廻うあれい吉川元長そなつ此人と切取てその〳〵ち加藤と探〳〵うさんと五百餘騎と三手に分二手い吉川に向ひ一手い加藤と押えさう金子敵と前後に受たまとも加藤う手の飯田森本井上木村これ等い更に〳〵数ふ〳〵べたく清正と元長と是非するとおのひ詰たる処に吉川元長そなと向つい是を真に優曇華の春なち得たる心〳〵と延上う〳〵突うけ切

立いとも烈〳〵さ軍ふう上方の合戦なるも是わと間なく戦い覺えさう〳〵と後に吉川語うけう時刻うつりてその日も既に午刻久武内藏助い手勢と勝うて一万餘騎静々と勢と押けるい峯と出る夕立の雲うあ〳〵ぬう林に宿うと急くなる懶鳥の翻る風の夕にさも似さう〳〵とさ〳〵うさび旗の手とに打かひく一村とくさの穂に出る若侍の鎗先と爭ひ〳〵突う〳〵と吉川勢い仰天〳〵備と亂〳〵て久武に向ふ清正う侍に飯田角兵衛ちゝめう金子う振舞合默〳〵ゆう〳〵まと後援のありのやさん其時の手當と熊と引とられて居たり

しゝ久武と見るゝうちゝゝゝ金子の加勢なるぞや
あまとまゝと押詰て息ともゝ継をゝ切うゝる久武
う一万余騎吉川飯田と左右ゝ引請火花と散しゝ
戦ふありさまゝ天帝修羅の闘浄とたとへゝ引と目
ゝ見ぬゝ是ゝゝ争て勝るへき然とも荒手ゝう案
内者ゝう飯田も吉川も必死ゝゝうて汗を流ゝ手
と砕いゝ戦ふ処へまゝゝ一手二三万も有らんゝう数
百流の旗と吹るひうゝと馬炮と號たゝゝ馳来と敵
う味方うと能見ゝゝい長曾我部彌三郎信親阿州ゝ
向ひ大和大納言近江中納言の両勢と打破ゝう牛角
ゝ対陣ゝ居たゝひゝるゝう豫州の軍急なうと聞て熊

谷四郎左衛門金子久武ゝ吉川加藤と合戦をる体
と見て洪と流ゝ彌三郎殿ハ奇代の良将ゝう伊豫
ゝ居ゝゝて讃岐の戦と知讃岐ゝ居て阿波の軍と
悟ゝ阿波ゝ居て豫州と知ゝゝゝと實ゝ天地ゝ通ゝ
未然と察しゝゝと申ゝる大将の在四國ゝう争て
他人の競望ゝ及ふゝゝけんやと云つゝ士卒ゝ向ひ
若殿の仰の如く此手の軍ゝゝゝ急ゝうゝ是と余所
ゝ見ゝゝゝゝゝや打掛ゝう金子殿と援らんとおめゝゝ
面々とてゝゝ疲ゝてゝう兵粮つゝひ一息継て我等と
共ゝ一駈駈て給へゝと云へゝゝゝゝゝゝ其意と承ゝう
ひとゝゝゝゝゝゝ二万五千餘騎真固ゝなゝうと走掛

とハ熊谷四郎左衛門尉うろこび入ていつさくら
ハ久武との〻跡と黒め申へしとて十三貫目の鉄
の棒と打ふり〻加藤う手へ切てう〻人馬とい
ちじく打倒し〻叩さ立ハ飯田森本にのひも寄ひ
散々ゑ切崩さゝ四度路ゑなれハ加藤清正是ハ志
たう侍ともの手ゑ合つさ敵ふ〻ひ清正向ちて叶
ふまじとて例の大うさ鎌の鎗あつとう熊谷ゑ打
てう〻る熊谷ハ清正と見知たう是非一打と追ま
はし追ふひけさしゆゑ廣さ野の内と六七十返も
追あひしうとも双方名たゝる勇士と名将更ゑ一
所ゑうう合ふとなし〻兎や角そるうち日もそろゑ西

山ゑ傾けハ吉川も加藤も夜の合戰心元なし〻と勢
とまとあて備と立とハ四國勢も流石ゑ疲ゑたり
上方勢のたゝ〻ぬと幸ゑ味方とまとめて引たり
けゝ加藤う陣ゑハ勝関とあひ首帳と記しけるう
名ある侍八百余級生捕ハ百十三人凡てハ千四百
六十余人とうや金子久武熊谷う手ゑも上方勢と
千三四百余人打て損たれとも今迫屯を一陣処と
加藤ゑ奪られなとい傳兵衛も面目なし〻と無念の
涙ゑむをとひしうとなり

加藤清正土州へ發向の事
并清正道ふさ山林と押行事

加藤清正ハ金子傳兵衛熊谷四郎左衛門と打破り
金子う陣処と奪ひ取てその夜と明し翌日辰の刻
うう久武金子う兼て守る処の本城へ切てうる
此処ハ峯高く峡崎遠く連り道細く〳〵と峻し〳〵岨
たてハ責るゑ難く防くふたゝうゝ清正下知と
らく道細けれ共谷ひろし木と切て足うゝとな
し進めや〳〵と真先ゑ立て無二まと無三ゑ切のか
る其勢まとゑ地雷火の散亂とるう如く目覺しか
んといおろろいうう金子傳兵衛ハ一の虎口と請取
て固めうひるう太き竹と切そのて先ととら
し油と付て火ゑ炎う寄手の坂道と上ると見とま

し雨の如くゑ投うけ〳〵とい沓の子と打し如き寄
手ふう仇矢なく内兜と射らゑ綿噛ゑ突貫れ又い
馬と刺ゑ手負死人幾百人といふことと知び寄手も
流石ゑ色めきと立と熊谷四郎左衛門きつと見て例
の鉄の棒とうろ〳〵と打うゑけ坂と下りゑ叩きた
つとい寄手矢まわふ打倒され嶮しき坂うち人雪
磨とな〳〵たうけつと金子傳兵衛得きうやわふと叫
き喚んて切て出命と際ゑ狂ひ廻ゑハ飯田角兵衛
加藤清兵衛ハ叶ち〳〵とさつと引森木儀大夫と
ゑハ金子傳兵衛昨日ハ道〳〵たう今日ハ渦さし〳〵と
潮の涌如く責立て打共切とも一足も引し〳〵と競ひ

めつる然とも坂道そこ立て大勢寄るたゝかふあけ
といつれも〳〵的なりて打とたり清正此体と
見て廣こゝに引出し打取んとおのひけとへ暴に勢
と引上たり四國勢これと追んと逸うとも金
子傳兵衛心得て手勢とまとめ勝関とあけ坂道と
上り爰〳〵こと切破り上る便りと妨けり其後
首帳の式と取行ふに小林杢之助板垣三郎右衛門
立野與八郎以下加藤り侍の首百三十二級と元親
の陣処へ送り寄手とまぬさらや寄よと待りけと
と加藤清正い思ひもつゝび金子傳兵衛に責破ら
と人数多〳〵討とそこと殘念なり然りとも心憎さへ

金子り今日の竹鎗なり坂に投る勢とお
のひ付〳〵こと實に智謀の侍りかとあそこ感歎した
る処へ小早川り許より早打來とり何とりおと呼
出し車の始末と聞に大洲宇和嶋とそこ〳〵の城と落
とこと九討取首并に生捕い帳面ありと申すと清正
大に歓ひ使者に引出めのと與へこれと勞ひそ
のこち清正おのに様西伊豫左様に平均したらん
に土州いつり計さこくらん然い是より土州へ
切入たこまろい彼國と打破らんと掌のものと
見る如くなるへ〳〵然るに是より土州へ通ふ路に
金子傳兵衛城と築さ切処と便に防くこと急なり偖

へ此城を責り〳〵そのちゑ〳〵ぞへ土州へ入らるゝ去とて爰ゝ数日を送るうち人ゝ先立をんとへよるも口惜し但吉川を謀りて此所ゝ残し清正一手山越〳〵て土州ゝ入るゝやと思ひ立しうへ元長ゝ向ひ聞るゝ如く小早川殿西伊豫と攻わるゝへ城城の仕置その外清正罷向ひて相談をへく思ふふう然とて金子へ強敵ふう御邉ふゝて是と對揚をへさのなゝ如何と思しいやと問へ元長一議ゝ及ゝび畏てい御心安く西伊豫へ御越わるとやと心淺〳〵も答えひう清正大ゝ悦ひ然へ西伊豫へ罷越申へ〳〵とて引分ゝ其日直ゝ發向ひ金子う方へ

大西白地の陣ゝう飛札到來し西伊豫小早川のとめゝ責破られたうう〳〵てい本國へ敵の亂入心元なゝ早く金子へ燒山の城ゝ入て上方勢と防へ〳〵と下知なうう〳〵へ金子も大ゝ驚き久武ゝ向ひ白地ゝう御下知の如く西伊豫とゝゝ上方勢ゝ打取とつとへ本國ゝとゝ危急の場合ゝなうたう然も軍の勝負いゝ〳〵定まゝへとへ共終ゝへ地を狹めゝとんと鏡ゝうひて疑ひなゝ如何ゝもして土州とうへ元の如く知行ある樣ゝ謀うたゝのなう夫ゝ就て某一つのユ夫あう此處と御勢ゝて戍らをゐひ何と上方勢仕うひひ共遠く御打出

なく御あゆつうあるへくい某い白地より御下知
よ従ひられより焼山よ罷越國吉五郎兵衛と共よ
彼處と守り申へくい但今生すと御對面申さんと
時宜よりて又あるよ覺えい面々能々守り
あへゆと懇よ教訓し金子い焼山へ出立ひり抑こ
の焼山といふ処い國中第一の切処なり前すい数
十丈の谷川ふうく流れ後すい峨々たる高山幾重
ともなくそびえ樹木多く茂れとも斧斤と入れた
めしふしされい長曾我部の居城よ向ふ者此處よ
至り馬い蹄と休め人い糧と養ふと尋常とおもし
うべ然い元親も此処と金子よ守らをしなり又

加藤清正い小早川よ引分れつの山道と踏ひらけて
大切と立ーと元人ふうぬ良将ふる上鬼神のさと
けといふへきのなり
土佐國圖ふ考ふるよ焼山い高岡郡よわり伊豫
國宇和嶋より緑村よ至るそれよりうんとう坂
松尾坂と越る此坂と以て伊豫土佐の堺とい坂
と下るこい土州幡多郡宿毛より松尾坂ハ三里半
の峠ふり宿毛より中村へ至る中村より高岡郡
窪川それよりうりのうつ坂出見と過谷川と
渡るそふくち焼山ふり然る時い焼山いをてよ
土州の正中ふるよ似より行程と問よ宇和嶋よ

を宿毛よりする十三里宿毛より中村よりする六里中村より川ふしする十二里より川よりう窪川よりする十五里窪川より燒山ふしする三川坂を越すと云う又邉路人より聞よ土州の一里とつゝく五十町の処あり七十町の地わり東國の行程とおゝ〳〵とつゝく

重修真書太閤記十編卷之廿二 終

重修真書太閤記十編卷之廿三

加藤清正燒山城を乘取事
并上方勢金子傳兵衛合戰の事

金子傳兵衛豫州松山表を引拂ひ燒山より籠城しの
る由をい加藤清正うつて知されとも小早川う西
伊豫を切從〳〵由を聞隆景土州へ切入あへ土州
へ不日ふ平均をつゝ然るを徒よ金子と對陣さん
と無益ふりとおのゝひまつ金子う押えよ吉川元長
と戮〳〵置其身へ直ふ小早川う陣処へ馳向隆景ふ
對面〳〵大洲宇和嶋の勝利を賀〳〵此上へ土州へ切

入るゝと肝要なりと申せしかは隆景聞ていな
たるあるべし御邊松山表に於て抜羣の智謀を施し
ゐるゝとも某心安く西伊豫に切勝ひ然い全く以
て加藤殿の太刀風に靡きひ所なれ土佐亂入の車
い御陣代たる加藤殿の御下知次第と申けるゝに
て清正も大に悦ひ何也とも小早川殿の御軍功莫
大なるに早々土列へ御討入ひと申せしかは隆
景二万餘騎にて燒山越を攻つきたゝ出陣あれい
清正一手へ後陣に備えさう小早川勢燒山の要害
に向ひ短兵急に攻るゝ勇さに勇んて押寄ける
に燒山の此方に細谷川あり岸高くして水深く

されとも杭なき橋と掛たりしかは秋森佐九郎宮
川六郎左衛門と云へる先陣へ九十人ひしゝと渡
りもゝりけるに此橋つゝに掛さうけん向の橋詰
に立こうし頃その橋列上りて九十人の軍兵と
も數十丈の谷川へ真逆さまに落入しかは生死い
知れす失にけて渡り果しものい向ふの岸に立て味
方とまねく此方の岸なるへ橋と危ふきとさう
得と隆景是をみて殘念や謀とさう其義なるへ此
川一つ埋て渡しと下知ひしい二万に餘る軍兵
手毎に木と斬枝と折川へ投入もさうしかとに
忽川へ埋りて平地とある其上に板とさし楯と

並〳〵うへ軍勢心安く打ちさう山越谷と回りて進む処に一川の城わり逆茂木幾重とかく引てその中に柵と二重に振たり見上るいとゝこの旗数十流峯のあ〳〵に吹ひるがへと鳴と静て扣えたり隆景これを打望て是い焼山に有ものとあり

とても路と塞ぎて人と關るを如何にとん打破りて通るへ〳〵と下知しひとい死生不知の中國武士我おとらじと攻上る坂ゝち既に十餘町も越つゝんとおわ〳〵き頃山上に竹と二尺ばかりに切尖その上と焼たるを五六十つゝ一度にどつと投うけ〳〵うへ寄手四五千とき間あく登り〳〵うし処

ふり或い肩に中り背に中りまたい股と傷らと馬に疵つく〳〵寄手ものゝ間に手と負て倒るとふをい跡にうに進むものの登りあくるて躊躇と城中にうに見とも城戸と関て突て出人とも馬とも婦女とい

男一丈ばかりの鉄棒と打ふり〳〵叩き立る寄手是を當ると幸に切て廻るその跡に六尺有余の大う為に多く亡されたり隆景まさに手勢をつさめ進め〳〵と競へとも路い狭し坂い急にうに上ゝうゝる勢とものに譬ていとふゝ彼輪宝の山と崩るに異ゝゝび小早川う勢ともまくうに落されて人馬ともにたゝゝまへうに隆景いうにもして今少し廣

さ処へ引出し取圍んと皆殺しゝをんと謀りとて城兵心得たりと長追をび隆景ゝの様この城小さいとて城将ゝ深く謀りゝゝ如何ゝて此外ゝ道もゝ然とて此処と攻落とゝ心ゝ矢竹の計策ゝ今まて見及びゝとなゝ又聞傳えゝともゝ殊よくゝ橋のそうゝ楠ゝ金剛山赤坂ゝとの軍のの語よい傳ふる跡ゝも非ゝその上ゝ大勇力の武者の手並只のゝゝ然と名乗れゝ其名を知と誰ゝ此手の大将の名を知たると尋とい孰も其と知たるのゝなゝ加藤清正ゝれと聞ゝゝゝ矢竹のとい

松山ゝて金子傳兵衛ゝをゝとなりその大勇力の侍ゝ鉄棒ゝて打たゝゝと聞ゝ熊谷四郎左衛門ゝさも似ゝうたゝゝ松山ゝ此處ゝて本道ゝ来ゝ小早川て路ゝゝゝ聞ゝ本道ゝ殿の御勢の道々見掛ぬゝいゝもゝゝいゝて此處へ来ゝゝゝゝと覺束ゝと申ゝるゝゝつ隆景も殆感ゝ入たる元親の軍策ゝゝとゝゝ清正さてゝ本道の外ゝ人の知さる山道ゝとゝのえゝゝ然ゝ小早川殿の御勢ゝの城ゝ向ひ御ユ夫とゝて攻ゝゝゝ我等ゝ山道とゝゝゝ城の後へ廻ゝ金子傳兵衛と生捕て内大臣殿の御家人

とゝへさなりといふと隆景うゝ聞て清正まい山
道と踏分ゐるんとゆ此山嶮岨まゝと外るゝさ道
ゐ〜何こゝ〜ふゝ分ゐるひ〜のち便宜とい何とか
〜其上ゑ山深〜今入ゐるゝこゝゆ専ゐゝさゝよゆへ
〜ゐゑゆとゆへい清正其義い小も苦〜〜〜〜
狼狽りて知を奉らんと約束し清正陣屋ゑうゑう
是ゑう山上ゑ入て此城の後へ廻らんとゆへい森
木儀大夫進ゝいて某ゝ〜〜〜う左様ゑ考ゆへとも
山高〜谷深〜ゆ〜ゆい進ゝう〜〜ゆらんと存〜黙
止〜ていと申をい飯田覺兵衛も同〜様ゑ申てい
とゝ止むるゝ清正聞て此山い地ゑ續ゝ〜〜ら中ゑ

立たゝうと問森本飯田口と揃へ地ゑ續うぬ山の
あるへゆ實ゑ大地ゑ續ゝ〜高山ゐうと申ひ清正
莞尓と打笑ひ三四十人と擇出し山路とゝ〜て分
入るその人々へ誰々そ森本飯田木村又藏井上大
九郎同小九郎齋藤立本赤星太郎兵衛鵜平次小代
下總庄林隼人石川兵部と先として三十九人斧鋸
鳶口大細引銅鍋金手木木手木鉄炮鎗白米及ひ塩
をの〜腰付ゝ〜又ハ肩ゑうけ岩ゑ傳ひ岨を歩ゝ
天正十三年七月八日ゆ〜〜て山路と分ゆ二
里〜〜〜も來り〜〜とゆゆゑ処ゑ家負二十餘軒
と見出〜たう清正悦ひその家のうち尤大ゝなる

家に入て見るに八十有余の老人あり清正その者に向ひ是なる焼山越の道あるか焼山へ何処へ當るやと問へ老人答ふる様此処より焼山まで六さ〻〻〻一里に足らざれども此あり奥十餘町なるに口二十丈に及ふ大谷あり其谷を越るに平地なるて山の峯續きなりと申けるゆへ去若きものを案内に出をとて先に立て次第〻に分行へなるて大なる谷あり案内の若ものの此谷を廻りへへ上り下り一里に遠くて此峯を傳ひて南へ廻りて時へ廿町に足らざれども路をたゞ〻〻二人とへ並られぬと云と聞木村又蔵そなへ

易きことのゆへと云うとられて大木を押倒し〻〻忽に幅二三丈の桟を作りてなるほどいのつるも打るたり猶ゆき〻て見るに廣き野に出たりそれより東を見るに雲のあるさに旗幾流か見ゆるは焼山なりと教ふるゆへそなふることさて道を急きけるに日もそろ〻暮なるに其処に寄集り火を焚て兵粮を炊を終日の疲を休まをけるに夜に入つるとも山深けれへ虫一つもなすまてそいろんや鳥獣のこへ影も見をぐさなるに案内のものとも たゞ知ぬ山路なれへ快くへ寐もやらぬに清正一人大鼾にて前後も知ぬ打ふたり夜明けるへ

東より見ゆる旗馬印と目當として道ある処の木を引抜まゝに伐倒し谷より降り川を渡りうらくしく傳兵衛の籠りたる燒山の城のうしろへ出つゝ是天の與ふる処なりと大に悦びいつゝも暫時息と繼その〳〵ち枯木と集め枯葉と積たそゆうて焚上げまゝに炮高くとひえるるを小早川はなれを見付をくゝ加藤ゝ城の後へ廻りしと見ゆるそと大に力と得さう加藤は段々城に近付けるを石工二三十人集り居て石と切出し清正其者と取巻其方とも何の為に石と切やと問へは是は燒山の城より仰付られて切出さるゝと答ふその時清正石工

に飯をたうとて兵粮十分に持たゝめ殘るとは石工に喰と其後城中へ案内をせと眼をいらゝしく下知しけるは石工ともふる〳〵命を助るへと申に案内したる後へゆるそべし先に立て急けくと追立る小早川はそ約束をし加藤ゝ火の手を上げるを力と得日暮ゝ短兵急に攻上る城中に於ては如何なれは寄手々々に攻上るやらんいろ〳〵ふるとも城中ゝ打出るとゝ引付撰ミ打に打取へしと金子國吉に廻りて下知しけり寄手は夜に入けるゝ松明を燃したれは山中まとに白晝に異ならす加藤清正以下

三十九人石ユヨ案内さを城中ヨ入げれい金子う
軍中の目付ふれと見とうめ面々い見ふれぬ人々
なうさうとも寄手の来るへさ処ふ〳〵ゐへ味方の
衆ふるへ〳〵御名乗いへと申げるよう木村又蔵
真先ヨ進こ是い白地よう加勢のためヨ罷越ゆう
のなう名い木村又蔵といふふう早く咎めしのの
乃首と打落と是ヨ驚さいつもも狼藉のの餘さ
と切うゐると森本儀大夫飯田角兵衛心得たうと
いふまゐヨ右と左へ切ふをとう三十余人の人々
いつとも心々ヨ働さやうて役所〳〵へ火と掛げれ
い城中以の外ヨ周章し上と下へと混亂と清正大

音揚今夜裏切の大将い内大臣秀吉公の御使加藤
虎之助清正ふう城の大将金子傳兵衛いつくふわ
ゐや見参をんと呼ふう〳〵切崩し突散しけるわと
ヨ追手の方すい小早川隆景城中ヨ燒亡わう必定
ふれい加藤う火をうけしふるへ〳〵手と合さて捻
落をと聲々ヨ喧叫攻ふゐる金子傳兵衛肝とつふ
し燒山こう峯傳ひヨ豫州へ通ふ道二筋あると如
何すして清正ハ知たうけん剛将の下ヨ弱兵ふし
おそろしくと舌と巻て感心し然とも清正と一當
あてゝ見ちべきぞと清正う立たるうへ押向て
六十餘騎ちこうと傾け切てゐる清正金子と見

てけもい森本飯田よ目交し真中よ引包を餘をま
しと責たつる清正いうゆふて金子と生捕よをんと
思ひしうい左のゝ手強く討もをび打ゼもをび東
西へ追やゝうり南北へと追立けるよりのう金子もん
やゝ其意と悟り清正と一所よ寄てい颯と撫ぬけ
左よ逢い右よ対し透間ふけもい井上大九郎走寄
て無手と組組もて金子身と翻へゝ一刎をぬもいハ
おいいうよ井上う手よ金子う鎧と引ふをて金子
い見えび此方の塀よ飛上りたる金子傳兵衛大音
よ井上大九郎骨折と打笑ふて立たるハ不思議と
云も餘うあり清正おれと見て天晴早業九人ふゝ

しと褒たりけ是熊谷四郎左衛門い金子よ續さて
駈出しうり例の十三貫目壹丈二尺の鉄の棒を以て
拂てい叩きふを叩き倒してうつさと打從横無尋
よ叩立たりされとも城中次第よ燒募り追手ふり
小早川隆景搦手ふり加藤う勢とも込入しうい金
子傳兵衛今おそ討死をへゝと思ひ切八百余騎と
前後左右よ立て小早川よ切りゝる隆景の手ふり
堀權大夫金子と討んと走寄とい目ゝもりけど隆
景の旗本よ切て入火花とちゝゝて戰ひけるう金
子う鋒つよけもい小早川勢左右へ開て通しけり
木村又藏飯田覺兵衛是非よ金子と討取んとさり

付く戰ひける処へ森本儀大夫齋藤立本ー包んで責立ーうい三百余騎ハ討ゝて五百余騎血眼よふうて揉合たう森本齋藤切立られ引足よなうひける と見て加藤小早川わよとやーと駈けると金子熊谷ちともひるまず戰ひーうい二百余騎ハ討ゝて残るハ七つうよ三百余騎手負ー猪の荒るゝ如く隆景の本陣さーて駈入い隆景も是わとよ思切さるのゝと討んとをハ味方も若干損をへーー緩めて是と打止ゝと下知ーつゝ開てい打てい開き廣さ処へ引立ゝとい金子熟つゝ様大勢の引うゝる へ我と廣らくへおひくなうゝ小勢ゝて廣さ処へ掛合

へ益るさのゝよ同ーくいハ加藤よ逢て一軍をんと味方と見ゝとハ二百ちうよ討ゝされとう金子熊谷とこーも臆とる色と見をゝ加藤ゝ旗本へ切て入加藤元ゝう傳兵衛と殺をゝーと思ひつゝとい右へ左へあーらくて必と討んとをされとも七十余騎へ討ゝとゝう金子熊谷うゝ抜て猶も進ゝと熊谷四郎左衛門金子よ向ひ軍い能仕さう誰すとも見苦ーとい申ゝー但長曾我部の家今日滅亡といふも非ゝ打破りて本國へ引返ー殿の御用ふ立ゝふへといとれて金子鎗取直ー傳兵衛今年五十歳人壽の限りと聞ゝのゝとゝつゝて命と惜むへき然と

も熊谷殿い年若くそれゝとの事ゝ氣の付ゐゝ長
なるゝさ我等老ゝ若き御邉ゝ從ふへゝと云つゝ
加藤ゝ手ゝ向て一合戰そのゝちこもゝも成へ
しといひつゝ真丸ゝなりて詰ゝる加藤ゝ手ゝ
ゝい赤星太郎兵衛井上小九郎庄林隼人鵜平次小
代下總石川兵部加藤清兵衛ゐゝと走寄いゝゝ金子
との一鎗參ゐいちんといへい金子傳兵衛百三十
余騎と前後ゝ立て切ゝゝゝ是い四國ゝ名と得し
金子傳兵衛伊豫國高尾の城すて討死をへき身の
死もをびまゝ松山の加勢ゝ加ちゝそれとも落さ
ゝ幾度となゝ上方勢ゝ掛合たゝとい軍ふゝといを

のゝとのゝつて知ゐゝ年にゝりて五十歳生て
後栄いゝゝぐゝゝゐゝゝん死ゝて名と後の代ゝ傳え
んのゝとゐゝへゝとも我等如さの業武者とい上方
衆の歴々い定めて数ゝもゝゝゐゝす恥ゝすゝけ
ゝとも一鎗請て御覧をゝと大音ゝ呼ゝりゝ突ゝ
ゝ加藤ゝ手の者十五六騎を突ふゝ荒ゝあて
て走廻ゝとい赤星太郎兵衛井上小九郎ゝ伏て清正
の内意と請ゝ事あれい一太刀切てい飢と引二打
打ていそゝと引金子も是と知たゝとい更ゝちとも
油断をゝ庄林隼人ゝ向ひいゝゝ金子どの先
刻ゝの御働ゝ若めのゝ及ゝねと御見事ゝい後

の修行のため清正う郎等御相手まゐ不足ふれと
も錆鎗一本参りゐと聲うけふ〳〵突出し長穂の
鎌鎗金子見るもう天晴鎗や大和鍛冶金房隼人と
見請さう此迫度々手柄仕るゐつ〳〵ん然とも其鎗
傳兵衛まゐちと不足まゐといふうと見まい忽ち
隼人う鎗の太刀打とうつ〳〵と切て剪打たり隼人
とう〳〵め齋藤立本小代下總その場まゐて目を
おとろう〳〵實も〳〵四國第一呼まゐも理ふるうふ
早業うと感とる聲い止さるけうゆゑ〳〵ありて小代
下総うび向ひ聞〳〵る増る金子殿の御習練やむう
〳〵い武藏の兒王黨今い九州肥後の國の田舍人見

参申とと名乗〳〵い傳兵衛崇尓と打ひいつ
まも〳〵加藤殿の御うちち人殿まゐ習ふて勝まゐふ然
とて四國ののゐ左もひとびとといふうとおりへ
いいつの間まゐ小代う鎧の袖まゐ備前うちのう〳〵鍛
へる柳葉とうつ〳〵と打されとも小代う鎧い重
代まゐて小札の試とう〳〵たまい裏う〳〵すてもふ
めうひと

小代下總守重定い兒王黨入西三郎大夫資行の
男小代二郎大夫遠弘の後ゐう遠弘武藏國入西
郡小代郷号冨永友縄吉田村内田地一町を領せ〳〵
まゐう小代を以て氏とふ〳〵たるゐう小代と云

処今川越ゟ西北松山ゟ南ゟあゝ但小代下
総加藤ゟ従ひ〳〵へ天正十六年の後なゝ金子傳
兵衛と合戰覺束ゝ〳〵ちら〳〵流布本ゟ従ふ

重修真書太閤記十編巻之廿三

重修真書太閤記十編巻之廿四

金子傳兵衛勇戰自殺の事
并熊谷四郎左衛門尉生捕ゝ〳〵事

金子傳兵衛尉今へ是すてと思切たり〳〵へ加藤
清正の家臣小代下総其外赤星太郎兵衛庄林隼人
加藤清兵衛等と追つ追ゝとつ戰ひけるゝゆゝもと
とへ加藤ゝ手の者色めき立て見えたるゝゝ加
藤清正生捕ゝをんとおのゝゝゝ多く士卒と負
〳〵つゝと斯の如く軍〳〵そへ味方も討ゝと敵も却て傷
〳〵へて某手と下〳〵手捕ゝとゝへ〳〵と四尺八寸

の大景光真向よさ〜挿一真一文字ゑ切て入大将
〇〇くの如く手と下〜〇〇へ誰うへ一人後ゑ〜さ
木村井上森本飯田いつも〇〇抜連て切うゑ〜へ
金子う勢も是ゑ加藤将軍ゑ是非ゑ討取冥途黄
泉の先鋒とせんと跳さ叫んて寄たりけゑ加藤う
侍とも我打捕んと拱うるゑ金子う勢へ引組て
〜違へもう立〜戦へ暫時の時の間ゑ死骸へ積
て累々と血へ流〜て混々たり只今迫百三十騎と
見たう〜も多形討〜てうゑ十六七騎ゑあり
けり金子へ此勢と見廻うて涙とふる〜面々いろ
なる前世の宿因ゑひうゑてや是ずて付添ゑひ〜

事の嬉〜さよう〜ふて某運と開くこと有へ一郷一郡
と割てゑ〜と今ち今日の恩ゑ報ふ〜思ひ〜ら
とも如斯成くつると戦の罪ゑわ〜び各々の働鈍
くゑひくび軍へゑ十分ゑ〜て誰うゑれと悪
しといどくん然とも傳兵衛運盡たれへ只今爰ゑ自
害〜て草の蔭こう隨従の恩を謝〜申へくとう
て鞍の上ゑ立上り鎧の上帯切てとて大音聲ゑ是
へ伊豫國高尾の城主金子傳兵衛尉ゑう年つもう
て五十歳戦ひいおのゑふと仕たう刀て落を〜人
も若干あゑへ死手の山越三途の川渉うもさひ〜
〜び只今自殺〜て先立〜人々ゑ追付申へ〜生

首とうゝとつゝとふうとさうとて我等うも死首よても大将の見參よ入たゝんまい雑兵の列まいよも置ゝとゝといいとて腹十文字ようさ切太刀の鋒と口よくいへ真逆よ落るい目覺ゝゝりひる次第なう加藤清正ゝれと見て嗚呼あゝさうふ残念や四國隨一の侍とうねゝ思ひつゝい如何ゝもゝて是と生捕内大臣殿の御家人とゝゝ天下の寶とふそへうゝと手延ゝて此ありさま然とて又あるまゝさ侍なう必々首と取ゝふゝゝ清正計ふ肯わうと諸手よ下知ゝて是と止む折ゝも恥くる馬炮誰なる覽と見廻ゝい熊谷四郎左衛門尉加藤

う兵士と戦ふちう清正下知ゝひるい實も一騎當千とゝゝれ万夫不當と稱をゝるゝい此人ふとゝゝふらん度々の合戦よ一度も不覺と取ゝとゝゝことを聞ゝ心ゝて生捕よをゝ掛い逃よ追うひる馬とい突とも人と傷くるなと大音聲よのゝゝうゝ駒めゝる熊谷もさゝ心得例の鉄の捧ようて打拂ひ打拂ひ狂ひまはうひるいうゝひん松の立木ふうちあてゝおのゝゝゝふゝと取おとゝ熊谷是と取んとてうゝ鐙よおう下う手とのゝゝて是と取清正う手の者能時なうと見てゝうゝうひ寄て馬の三途と切てひう切て馬い躍起るゝうよ熊

谷落馬して立上らんとする処へ木村又蔵井上大九郎同小九郎飯田角兵衛森本儀大夫折りさなうて手取足捕押えて縄を掛たりやつゝ後へ小早川加藤の両陣よく勝関を揚味方の手負をいさゝ又討死を尋ね勲功の賞と行ひ内大臣殿の御陣へ注進しける後木村井上飯田森本四人〳〵熊谷四郎左衛門尉と清正の前へ引連出たり清正あれと見るゝその長六尺三四寸眼尻さけて頬車高く肩い怒りて筋たくましく瘤大きく髯は針の如くちとも臆せず座よ着い清正聲りけめつらしや熊谷四郎左衛門尉其方わとの侍多く世よ有難く今よ

と清正と共よ天下静謐の功と立るとあり〳〵時四郎左衛門尉大よ怒り加藤とのい道理よ闇さ御方うなたとへい御手のめのろ敵よ生捕とその敵よ仕えたゝんと善とおわゝいろ某不肖なりとも長曽我部の侍すて金子傳兵衛と共よ一城と預りいひゝよ金子い自殺して忠義と全くゝいよ某い不幸よして生捕とい事前世の宿業よわるゝくいい早く首と召といへうゝ金子よ追付死手三途と一所よ越つきよてい何と仰らといとも生て御手よ屬し申へゝい存きべと申ひると聞て清正何りも忠臣二君よ仕えべと申事其方くらう知らるよ非を

されども長曾我部の滅亡したるんよりあと其臣たるものの一人も残らず死して忠節をも申へきなれ土州一國すらも長曾我部の家督立たらん時汝ら如く皆死亡したるい長曾我部殿い誰と共にその國を治め其城を守らるへきや無益に死を急らんらう何主家の立つさ謀をいと工夫をさるゆといとて四郎左衛門尉面をとられてのいとべ良あらて申ひるいいるに加藤殿長曾我部の家立たるんと時と仰らるといい如何なることすそや内大臣殿大軍を發して四國へ向くをあに上い何として長曾我部の家督と立あるへきや不審ことと仰らるゆ

のやといつへい清正不知ゆ内大臣殿い人の國と奪ひ人の家を滅をといい好みあるべたる朝廷の勅定と奉行しるふなるといい過と悔罪を贖らんといふと赦さしといい仰らるぞ朝廷い日本國の父母にはいい天下にあるとあるゆるのをへて朝廷の子民なるぬのあある父母として子弟の過をい正をへ何そあると殺をとと樂むへき長曾我部の先祖朝廷に忠功ありつるとスて土佐の國司に補をらるるひしなるる近く元親の代となりて先祖の跡と守りるるへ我國にもあるぬ國々を切取しこと善とおおのに悪とおおのに悪といおのひなるる主

の心より違くぬと臣たるものゝ道と知さるゆゑ諫むる臣あれい主無道より陷いるゝと云本文わり其方主に仕ふる道と知たるよ似て實い知を主人に対う國なゝぬ國々と切取て盗人の列に入と諫を我も同じ〳〵盗人の屬となりうゝと返をゝも遺恨なれ然とも内大臣殿土佐に舊を長曾我部と跡ものゝかさんといゆめ〳〵覺されど其方共能々大坂へ參上し主人の過を申開さたゝんゆい内大臣殿の御心も早く解るならん其をい思くゞ徒に死を急くこと去とい愚なる田舍人かと云れて四郎左衛門尉肝と消さても我々心と雲泥万里とい此事か

らん但仰の如く長曾我部の家の為よいゝ四郎左衛門尉何とそ死とい急さいつと如何よもゝそ存命仕う故主に帰參仕う度はそいへと申をゝう

い清正さも有へゝ左もあゝん然い其内へ其方清正う家にあるゝたとへい韓の張良う韓王の為に漢の高祖に仕へ蜀の關羽の魏曹操に仕へゝと同じゝうるゝ誰う張良關羽と二君に仕へゝと笑ふのあるかといゝれて熊谷はそ〳〵悦ひ顔色和さ見えゝうい清正自身立て熊谷らいすゝめの縄を切わとさ座と與え彌以て長曾我部の家滅亡をへゝ〳〵土州一國安堵をん時何國にあうとも早

速に帰参とへさ約束となりまづそれ迫い清正の旗本に在へひとても熊谷と名乗んとい然るへからい吉と吉と重ねるのわとて吉村吉右衛門と改めたり其後清正金子う外骸を取りて豫州高尾の城の脇なる山に葬うて塔を立て追福と營むしう味方のものへ云に及くび敵陣すてもおの車と傳聞信義厚き大将やと感をぬのおとを無うけと角て清正小早川う陣に至り焼山落去の慶と述まさへ金子う傳兵衛う始末熊谷うなう行とうとうしう隆景のことに感服し其弱年より軍に出しこと幾十度といへとと知と然る此山越の御手柄恐ま入

ていなう凡人ならとい思くれとと頻に賞歎した
まちう清正も大に悦こ然い是うう土州へ打入
白地ろう引返とへさ道と遮り元親の本城に亂入
とへさ由と評定しけるに何も尤可然と申けるに
う清正い我陣処へ帰り吉村吉右衛門とハ加藤
清兵衛と共に此処に殘し置とその餘い悉く土州と
さして發向を

四國勢切所に擾て清正と拒く事

并内大臣秀吉公南海を航に玉ふ事

長曾我部元親い阿州大西白地の城に居て讃岐伊
豫ととくに阿州の城々の手配とすしけるに何地

の合戰とても勝敗取々なるうち四國方より勝軍多く燒山の要害へ豫州より本國土州へ打入へき筈一の切處なるとして金子傳兵衛よりこと成らせなとへ如何なる猛將勇士も爰と破るものの有へからんと思ひ居たる処へ雜兵一人汗水よりなりて走る來る昨十二日燒山の合戰半なる時加藤清正道もなき山中と分て燒山の要害の裏手より城内へ紛し入八方より火と放ち燒立いよいよ城忽ち落金子は自殺し國吉は戰死熊谷は生捕しとも申又は討死ともたしかなる角てい御本國へ上方勢込入可申ひと注進ひ元親よりと仰天し誰とも

ふと見廻と処より窪駿河守と云の進と出其燒山より走向ひ上方勢と拒さ申へくいは御心安うれと申乃三十余騎すて出張ひ扨又小早川加藤両大將は燒山と攻落し是より本國へ切入白地の後と絶切れと企ける山峻く峯高く路狹くして岩滑うなる一人立の道すてと然も嶮しい兼て思ひしとは各別なるとして實も元親此地より擬て根城と云四方へ勢と分て咸と四國ふ振ひしとして両將共よりこれと讃歎と金堀ともと集めてあるとと鑿とるより一枚岩ふとい容易く鑿ぬさうこと其上ふ処々の要害より軍勢多く籠うしと見え旗の数も

日よそひて多くなりぬると以て加藤小早川の両大将の責あるべき道と替て打入るゆと評定ととなる数日よ及ぶ爰り泉州堺の津よりて日々四國の注進と聞をるよ何もつゝも粉骨と盡し勝利多うる中よ加藤清正土州へ切入んと計り燒山の要害と攻落し城の預金子傳兵衛自殺しつる吉落もなく注進したつひ秀吉公御機嫌うるわく然へ紀州より南海と押廻し一手へ甲の浦へ打上り一手へ播多へ漕付両方より攻入加藤小早川よ御力と添るよへしとなり御船へ乗て作らをむひつるとい數百千艘なり共事うると天正十三年七月廿三日堺の津と進發あるべしとなり

流布本并よ原本ゝか七月廿三日堺津出船のよしと記をり但此年七月十一日内大臣秀吉公と以て關白といひ平朝臣と改めて豊臣朝臣の姓と賜るる二条昭實公の代りなりあの日土佐と長曾我部元親よ賜り侍從よ任しあよ阿波國と蜂須賀小六家政よ賜ひ德嶋と以て居城とて讃岐國へ仙石權兵衛秀久よ賜り秀久從五位下よ叙して越前守といよ伊豫國へ福嶋市松正則戸田民部少輔よ賜よ市松從五位下よ叙し左衛門太夫といよ或書よへ天正十三年五月

十九日元親降參をしうい土佐一國と安堵しと
ゐ阿波國とい蜂須賀家政ゑ賜くう内一万石い
赤松次郎則房ゑ賜くう讃岐國い仙石ゑ賜くう
内二万石い十阿存保ゑ賜くる伊豫國とい三十
五万石小早川隆景ゑ二万五千石安國寺惠瓊三
千石い德居ゑ加增一万四千石久留嶋ゑ加增
ともも云又一説伊豫國河野四郎通直の壻と村
上右衛門大夫通康といふ來嶋の城ゑ住をしう
い來嶋右衛門大夫とも申をしなう長子通之德
居半右衛門とうふ秀吉公ゑう三千石と賜くう
しう朝鮮の軍ゑ番船と取とて三十六りて討死

を子無とい家絶こうと云番船の軍い文禄二年
也然とい德居う生とい永禄元年戊午りて天
正十三年い廿八歳なう次い吉清村上彦右衛門
と云次い通久村上久右衛門と云次ハ通總村上
助兵衛と云文禄四年從五位下ゑ叙し豊臣朝臣
と賜くう來嶋出雲守と名乘伊豫風早郡ゑて一
万四千石と賜くると云
又云七月十一日内大臣秀吉公關白ゑ任しるい
參内の時供奉の面々何も任官叙位ありけるう
中うも浮田秀家參議ゑ任い十三歳なう抑參議
い太政官中の政と參議とる重職なりとい左右大

辨の年勞あるものの又へ近衛中將の中ゝと才學ある人あるひい藏人頭の年功さへ七ヶ國の受領と經て公文の帶うなさ人是ゝ任をといへ四十前後なゝて此官ゝ任をへさゝあゝべ秀家幼年ゝゝと拜任をこふる自由の至といべゝゝゝ利家秀康秀勝をゝ少將ゝ任ゝ勝俊十七輝政廿二長益三十九信秀信兼前田利勝京極高次廿三井伊直政二十五森忠政十六筒井定次廿四大友義統廿四　稻葉貞通　丹羽長重　長曾我部元親　蜂屋頼隆　毛利秀頼　細川忠興廿四　蒲生氏郷　堀秀政三十三　長谷川秀一　里見義

康　廿一人侍從ゝ任を侍從へ元八人その内三人と小納言とゝ是もむゝへ中院閑院花山院大炊御門の家ゝそ任ゝ來う四條勸修寺葉室大福寺日野等の家ゝまてへ任せさゝりと那う云ゝゝゝゝ今日任官の人々ゝ於てへ職原典故と失ふと云へゝ

又云天正十一年柴田滅亡の後城主の定とゝふとあゝ南伊勢五郡伊賀尾張と領ゝ清洲城ゝ北島信雄郷勢州宂津城織田上野ゝ信良但馬播磨へ羽柴美濃守丹波へ羽柴御次九　越前若狹加州半國惟住越前守　能登加州半國前田又左衛

門尉　越中前田肥前守　美濃大垣ハ池田紀伊守　岐阜ハ同勝九郎　曽根ハ稲葉伊豫守　金山ハ森武蔵守　多藝ハ九毛兵庫頭　郡上ハ進藤左馬助　江州日野ハ蒲生忠三郎　勢多ハ淺野彌兵衛尉　坂本ハ杦原七郎左衛門尉　比田ハ長谷川藤五郎高嶋ハ加藤作内　佐和山ハ羽柴久太郎　丹後ハ長岡越中守　若州佐柳ハ木村隼人正　高濱ハ堀尾茂助　播州三木ハ知野勝右衛門尉　龍野ハ蜂須賀小六　廣瀬ハ神子田半左衛門尉　木崎ハ木下助兵衛尉　立石ハ青木勘兵衛尉　因州鳥取ハ宮部善祥坊　鹿野ハ亀井新市　伯耆羽衣石ハ南条勘兵衛尉　淡路洲本ハ仙石權兵衛尉　岩屋ハ間嶋右兵衛尉

備前美作ハ宇喜多八郎と見えそう

又長曾我部家法といふものを見るに太刀金造り除之鞍鐙等蒔繪紋金覆輪錦直垂紫糸威等官人國司大將之外不用之事下鳥魚一リに付て乃米二升を以て買中鳥魚一リに付三升ずつ一斗二升迫大鳥魚一リに付一斗二升ずつ二斗迫耕作人飯の品春一日の食乃米三合雑穀四合作業の日ハ乃米五合雑穀六合　ユルして同し下鳥下魚を食へ〳〵澁の黒塗赤漆三器不漆の折敷

たるべし秋八黒米六合作業の日中食と増冬へ
乃米四合作業の日中食と増とあり

重修眞書太閤記十編卷之廿四終